

基町の歴史や住民の方の記憶を広島ゆかりの美術作家が作品化



日程：10月8日（土）～11月6日（日） 会場：広島市中区基町住宅地区内各所

基町住宅地区において、地域の歴史や住民の方の記憶などをリサーチし、美術作品として残す活動を展開する「まほらプロジェクト」は、10月8日（土）～11月6日（日）の間、広島出身/在住の美術作家5名による作品展示「基（もと）いの町 2022」展を行います。

広島城のすぐ横にそびえる特徴的な高層アパート群として、広島のアイコン的な存在にもなっている基町住宅地区。戦後の住宅不足解消のための木造公営住宅からはじまり、1950～70年代の中高層アパート建設を経て現在の姿となったこの場所は、戦後の広島の復興を象徴する場所とも呼ばれる一方、近年は、少子高齢化や外国籍世帯の増加など、現代社会の複雑な現状を映し出す場ともなっています。

「まほらプロジェクト」は、この基町を舞台に、美術作家と共に、地域のリサーチや住民の方の取材をもとに、町の歴史や記憶を美術作品として残す試みとして2021年にスタートしました。昨年と今年の2年間は、その第一期として、広島出身/在住の現代美術作家5名がさまざまな形で地域と関わりながらリサーチを続けています。昨年は参加作家の過去作品の紹介展示とリサーチの途中経過の発表を行い、今年、昨年からのリサーチも踏まえた作品を、基町住宅地区の中の複数の会場で発表します。この機会をぜひ多くの方に知っていただくべく、情報の発信にご協力いただければ幸いです。どうぞよろしく願いいたします。

《展示概要》

展覧会名 基（もと）いの町 2022

会 期 2020年10月8日(土)～11月6日(日) 金・土・日開場

時 間 12:00～17:00 (最終日は15:00まで)

休 場 日 月～木曜日

観 覧 料 無料

会 場 基町住宅地区（基町プロジェクト活動拠点 make・display・基町資料室、オルタナティブスペースコア）

問 合 せ 基町プロジェクト活動拠点 M98 ☎ 082-555-8250 (水～日 11:00～17:00)

主催：まほらプロジェクト 共催：基町プロジェクト 協力：オルタナティブスペースコア、基町地区社会福祉協議会

本プレスリリースについてのお問い合わせ

まほらプロジェクト 基町プロジェクト活動拠点 M98 (増田)

広島市中区基町 16-17-2-103 | ☎ 082-555-8250 (水～日 11:00～17:00)

《関連イベント》

■久保寛子によるポエトリー・リーディング

本展参加作家の久保寛子が、基町の生活から言葉を紡いだ詩の朗読を行います。

日 程 10月9日(日) 17:30~18:00

会 場 基町ショッピングセンター中央広場

音響・映像演出 大村知空(クサムラマッドラット)

※事前申し込み不要、状況に応じ入場整理をさせていただく場合があります

■「基いの町」出品作品の対話型鑑賞

各展示会場を案内人と一緒にまわり、作品についてお話をしながら鑑賞します。

日 程 10月15日(土)・29日(土) 14:00~15:00

集合場所 M98

案 内 人 片島蘭(基町プロジェクトスタッフ)

申し込み方法 「基いの町2022」ウェブサイト(<https://www.mahoraproject.com/>)より

※要事前予約、各回先着8名程度

■小田原のどかトークイベント「作品制作と土地との関わりから」

宮城県仙台市出身の美術家・批評家の小田原のどかさんによるトークイベントを行います。

日 程 10月22日(土) 14:00~15:30

会 場 基町中央集会所

申し込み方法 「基いの町2022」ウェブサイト(<https://www.mahoraproject.com/>)より

※要事前予約、先着20名程度

小田原のどかプロフィール

1985年、宮城県仙台市生まれ。2015年筑波大学大学院人間総合科学研究科博士後期課程終了(芸術学博士)。彫刻家であり評論家としても活発に活動する小田原は、近代以降の日本における彫刻という制度とその現れ、そして現代の公共彫刻についての関心を作品とテキストで扱ってきた。長崎の爆心地に建てられていた矢形標柱をネオン管で「再現」した《↓》(2011-16年)は、「ゲンビどこでも企画公募2015」(2015年、旧日本銀行広島支店)や「あいちトリエンナーレ2019」(2019年、豊田市駅付近)でも展示された。共著に『原爆後の70年：長崎の記憶と記録を掘り起こす』(長崎原爆の戦後史をのこす会編、2016年)、『近代を彫刻／超越する』(書肆九十九、2022年)など。

《参加作家》

久保 寛子



《マイ ホーム タウン》2021年

1987年広島県生まれ。広島市立大学彫刻科卒業、テキサスクリスチャン大学美術修士課程修了。先史芸術や民族芸術、文化人類学の学説の研究をベースに、身の回りの素材を用いて作品を制作する。

基町高層アパートの住民でもある久保は、自身の生活を掘り下げるアプローチで、昨年は自身の出産・子育てを含め、基町で暮らす中で生まれた言葉や写真・映像資料を発表した。今年も、自身の生活から映像作品を制作する他、詩の朗読パフォーマンスを予定している。

鹿田 義彦



《「基いの町」のリサーチ》2021年

1983年広島県生まれ、広島県在住。2012年広島市立大学大学院博士課程修了。視覚芸術家として美術作品の制作、平面系のデザイン、写真表現の研究、造形教育を行なっている。

これまでも基町の住民が撮影した写真から基町の歴史を振り返る「写真展」のディレクションなどを手掛けてきた鹿田は、そうしたスナップ写真に写り込む「広島城」の存在を起点に、写真を通した「広島城」と基町の間を扱う作品を展示する。

寺江 圭一郎



《基町河川敷陶芸クラブ》2021年

1981年広島県生まれ。大分大学大学院教育学研究科修了。家族、神、他者や自分自身など、様々な対象に近づく方法を、四苦八苦しなながら探る試みを続けている。

昨年、住民の方々と陶器づくりをしながら関係づくりを試みた寺江は、今年、住民の方が持つ基町についてのささやかな記憶を他者が語り直すという、記憶の継承をテーマにした映像作品に取り組んでいる。

平野 薫



《river》2021年

1975年長崎県生まれ。広島市立大学大学院修了（2003年）。布に残る気配に着目して、古着を糸へとほどき新たな形へと生まれかえるという手法を用いて作品を制作。

昨年、基町の「場所」と「人」に着目し、自身が暮らす戸河内とデルタに位置する基町との関係についてリサーチを行うと共に、住民の方々から古着の提供を受けた平野は、今年、その古着を用いた作品制作に取り組んでいる。

古堅 太郎



《調和した尺度としての身体スケール》
2021年

1975年 広島県生まれ、広島県在住。2001年、広島市立大学大学院芸術学研究科修了。自分自身のルーツや場所に固有の歴史をリサーチしながら、共同体の中で変化していくアイデンティティをテーマに制作。

昨年、大高正人設計による基町高層アパートが、フランスの建築家ル・コルビュジエの「モジュール」という概念に基づいていたことを示す資料から、人間的な住空間の設計という考え方の背後にある身体への関心に着目したりサーチを行った古堅は、それをもとにした作品制作を予定している。

※本事業は、2022年度広島市立大学特色研究費「基町の地域社会に関与する美術の実践と記録」により実施されます

※新型コロナウイルス感染症の影響により、日程・会場等を変更することがあります